まちづくりひろしま
被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第１７号(平成２７年５月１５日)
読者数：５１７名（募集中）
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ：hirosima.idea.c@urban.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

三つの「か」

ガリバープロダクツ代表
通谷　章

ともあろうに、学生時代の私は数学のゼミを受講した。小学校の算数以来、まったく数字に無縁だった私が、である。

受講動機は判然としない。ふらふらっと気がつけば受講生の一人となっていた。これはもう、トラウマを超えて怨念を数字に抱いていたせいだろう。

数学ゼミの聴講生は八人であった。唯一の参考書は電話帳ぐらいの分厚いやつで、しかも英語で書かれていた。おぼろげに講義内容は集合に関することだったと思う。

私はゼミの時間が苦しかった。数学はまったく分からず、英語も幼児なみ。悲惨なのはそれだけではない。参考書代が高くて、買えなかった私だけが手ぶらで講義を受けている。教師の視線は冷ややかで、学生仲間は無視を決め込む。当然、結果は押して知るべしである。

四、五回の講義を青い顔をして受けた私は、早々に挫折した。この場に最も不釣り合いな人であった。その後、数学者矢野健太郎の本なども精読したが、今もって距離は縮まらない。数学と言えば、辛く悲しい思い出しかない。

それでも私の記憶に残ったことがある。数学の答には二通りあるといった教師の言葉である。一つの答えが「解答」。もう一つが「可」だという。

数学に二通りの答えがあるという話は斬新だった。「解答」は正解だが、そのほかに答えはないのか、本当に一つしか解答がないのかを探るのが「可」という考え方だった。まさに山に登る考え方である。答えを一つと決め込まずに、可能性を探っていく。それが「可」なのであろう。

昨夏、広島の安佐南・北区で甚大な被害をもたらせた土砂災害が起こった。いわゆる想定外というやつである。ひょっとしたら…かも知れない…という考えが及ばなかった事故である。

確か、建築基準か建築構造で、大雨時の想定があった。一時間で降る雨の量を想定したもので、雨水管を通る水の最大許容量が時間当たり八十ミリだったと思う。この八十ミリ、とんでもない大雨で数十年か百年に一度あるかないかの想定である。

ところがどうだろう。昨今は、八十ミリどころか百ミリを超える大々雨が平気で襲ってくる。まさに想定外の頻発である。そして、その一つが安佐南・北区の災害に繋がった。

八十ミリを超えれば、本管の送水も受け入れが困難だろう。また、溢れだした水の制御は効かないだろう。

雨が八十ミリを超えることは稀である＝解答。

雨が八十ミリを超えるのは百年に一度あるかないかである＝可能性。

よって、八十ミリを超える雨を考える必要はあるかも知れない＝かも知れない。

私は、街づくりには三つの「か」が必要だと思っている。「解答の・か」「可能性の・か」「かも知れないの・か」。三つの頭の文字を取っての「か」である。特に最後の「か」をどう考える

かが近年肝要となっている。街づくり「三・か・条」とでも記せば、何人かの記憶にとどめてもらえる気がしている。
さて、今年も雨の季節が近づいている。空を漫然と見上げているだけでは答えは見つけにくい。

ひろしまのまちづくりの動き

○かき船移転工事着手！

平和大橋の下流にあるかき船「かなわ」は、現在地より上流４００ｍの位置に移転する工事に着手し、船を固定する支柱を設置した。

現在地は治水上の問題があるため、国から水がほとんど流れない死水域への移転を求められた。市の手続きを経て昨年１２月に移転先の許可が下りたが、市民団体の「かき船問題を考える会」は原爆ドームに近くふさわしくないと移転撤回を求めている。

市は広島の食文化の発信は平和に寄与するし、移転先の元安橋脇には既にオープンカフェや船乗り場があり、問題ないという。これらは公益性があり市の整備方針として設置された。「かなわ」の移転先も水の都ひろしま推進協議会のお墨付きを得ているが、一営利企業である。

ドームの景観を守るためのバッファーゾーン内に本来あるべきでないかき船が、ゾーン設定前から営業していたため遡及義務から除外された。今回の移転に際して、常識的にはバッファーゾーン外に移すべきであった。もうひとつのかき船はそうしている。ドームに近づけたのは「かなわ」の意向を受けて判断がなされたと勘ぐられても仕方がない。被爆者や遺族の感情を逆なでするような決定は後後まで汚点として残るであろう。

＜コメント＞

若い人のインターネット上の書き込みには市の見解に同調する意見も多いが、被爆の惨状の記憶が薄れつつあることを示している。８月６日の灯篭流しを、屋形船に乗って打ち上げ花火でも見るような気分で楽しめるであろうか。このまま強行突破すれば、良識ある人は「かなわ」を利用しないという動きが増してくるであろう。営業上の不利益のため、「かなわ」自ら再移転の申請を出す状況になることを願う。　　（編集委員　瀧口信二）

○広島の復興の軌跡（第１２回）～被爆７０年企画～

広島復興に「二葉会」あり！

「あなた、二葉会を知っていますか？」、街頭インタビュー風に街角で聞いたとすると、恐らく返って来る反応は「知りません」、「二葉中学の同窓会か何かですか？」「二葉山に登る会ですか？」などがほとんどでしょう。「広島の復興に大きな役割を果たした経済界１１社の集まり」、と答えられる人は年配の人で広島の経済事情に詳しい極限られた方たちでしょう。

二葉会は昭和２９年（１９５４年）１月、広島の主要企業のトップ１０人が広島駅北側の二葉の里にあった旅館「芙蓉別荘」に新年互礼会を兼ねて集まり、結成されました。

１０社は中国木材防腐（ザイエンス）、東洋工業（マツダ）、中国電力、広島銀行、広島相互銀行（もみじ銀行）、中国新聞社、広島電鉄、広島ガス、藤田組（フジタ）、中国醸造で、後に中国電気工事（中電工）が加わり１１社になっています。二葉会の名称は芙蓉別荘の部屋の障子を開けると裏庭から二葉山が眺められたことから付けられました。

二葉会結成の発端になったのはその前年のラジオ中国（中国放送）の番組「新春座談会　初夢を語る」での中国木材防腐の田中好一社長の発言でした。

これについて、座談会に出席した浜井信三さん（１９０５年～１９６８年、初代公選広島市長、通算４期務める）が昭和４２年（１９６７年）放送のＲＣＣラジオ番組「ヒロシマ２２年」で次のように述べています。

「…田中さんがですね、そういう本当の夢っていう話は今日はできんけれど、いろいろ人生の夢っていうようなものは私はもっとるんだと、それをひとつ話してみようかということでそれには、広島市にいい公会堂をですね、ぜひ作りたいということ、もう一つは、広島の物産の、物産陳列場を作りたいと、もう一つはいいホテルを作りたいと、この三つのことをね、ぜひ我々

は協力してやりたいという夢を持っているという話をされたんですよ…」

この放送は経済界に大きな反響を呼び「広島市ができなければ我々(経済界)の手で作ってやろう」ということに話は進んだのです。

広島市公会堂

初代広島市民球場

「公会堂を建設して市に寄付しよう」との呼びかけに賛同したのが上記１０社です。公会堂は平和記念公園の西端、現在の広島国際会議場のところで、ホテル、レストラン併設の５階建て、総工費３億５千万円(現在の１００億円相当)を１０社を中心に全額経済界が集め、昭和３０年(１９５５年)に完成しました。

二葉会はその後も広島復興に大きな役割を果たしました。広島県庁舎、広島―福山電化工事の建設債引き受け、広島バスセンター、広島ステーションビル、県立体育館…、その中に旧広島市民球場があります。これは当時の東洋工業社長、松田恒次さんの「これからはゴルフの時代かもしれないが、まだまだ高級な遊びで、一般大衆のものではない。それよりも広島カープのホームグランドとしてナイター設備のある球場をつくろう」との提案をきっかけに昭和３２年(１９５７年)１月、二葉会は１億６千万円の寄付を申し合わせ、広島市に伝えました。建設工事は翌２月２２日着工、わずか５か月後の７月２２日に完成しました。７月２４日の初ナイター公式戦の対阪神戦、残念ながら１－１５と大敗しました。建設費用総額は３億２千万円掛かっており、その後、二葉会は経済界の寄付に対して「半額を持つ」ことが不文律になりました。

ＲＣＣの被爆４０周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」(昭和６０年　１９８５年制作)で、二葉会結成メンバーだった森本亨さん(当時８９歳、広島相互銀行会長)は公会堂建設について次のように語っています。

「…公会堂ですね、今のあれへホテルもくっつけましてね、ホテルはいかんのよあれは、公園地帯でね。それを池田(勇人)さんがおられた関係でね、無理にくっつけて、あれを新広島ホテルゆったかな、あそこへ作ったのが(二葉会)の最初でしょうね。

昭和３０年ですかね。あのころから二葉会ということで、何度も何度も集まって、しかし中心はね、白井(市郎：中国醸造)、田中(好一)、藤田(定市：藤田組)、松田(恒次)というところでしょうね。」

その後も「二葉会」は温厚な人柄でまとめ役の田中好一さんと強烈な個性で突っ走る牽引型の松田恒次さんの両輪で広島復興の主なプロジェクトで中心的な役割を果たしていきました。森本さんは昭和３０年～４０年代の「二葉会」を振り返り次のように話します。

「…まあ二葉会というものの、戦後の務めはもう終わっておりましょうね。今、二葉会があして、こうしていう時代とは、もう背景がちがいます、と思います。

けれどもその当時は、私はだいたい二葉会というものは広島の復興には物心両面に、(広島市長は)浜井さんから今度は山田(節男)(昭和４２年～昭和５０年)さんへ来とるのかな、渡辺(忠雄)(昭和３０年～昭和３４年)の時はちょっとありましたよね、山田さんの時まで寄付しとるとおもいますよ。私の口からいうのもおかしいが、まあ、寄付しとると思うね。」

最近、ある経済界のトップが記者から二葉会のことを聞かれ「まだあるんですか？」と答えたという笑えない話があります。

厳然として存在しています！ただ、結成当時から会則なし、会長置かず、事務所なしという会ゆえにその活動、功績は「広島新史」や「広島商工会議所９０年史」にもそれらしき記載は見当りません。しかし、現在でも広島商工会議所が窓口になり、広島でのビッグプロジェクトが計画された場合、その資金負担で行政などが半額、経済界が半額と決まれば経済界分の半額、全体の４分の１を負担しています。

被爆７０年に当たり、たぐいまれなる経済界のリーダーたちによって、「広島復興」が成し遂げられたことを今一度思い起こす必要があるのではないでしょうか。

(編集委員　三宅恭次)

○座談会：ひろしまのまちづくり～旧市民球場跡地で新しい市民まつりを～

「まちづくりひろしま」の「人物登場」コーナーで紹介した方々が集まり、ひろしまのまちづくりについて熱く語り合った。

・日　時：平成２７年３月３日(火)　１５：３０～１７：３０
・会　場：広島市まちづくり市民交流プラザ・会議室 B
・出席者：若狭利康氏、井上英之氏、松波龍一氏、石丸良道氏、進行：前岡智之（編集委員）

○まずは自己紹介から

（若狭）広島市中央部商店街振興組合連合会の専務で、NPO セトラひろしまの理事長。NPO 活動と商店街振興組合の橋渡し役。

（井上）プロジェクト・デザイナー。世界観・価値観の違う異種の人を集めて、ゴールを設定し、計画を立案して実行に移すこと。

（松波）これまで都市計画畑の仕事をしてきたが、今は主に湯来の里を守る活動をしている。

（石丸）セトラひろしまの副理事長として祭りやイベント等の企画と実施に奔走している。

（前岡）メルマガの編集委員で、日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会の委員長。旧市民球場跡地でまちづくりフェスタを企画中。今日の司会進行役。

左から松波氏・石丸氏・前岡氏

左から若狭氏・井上氏

○祭りとは

（井上）プロジェクト・デザインのキラー・キー（切り札）はシャープなコンセプトをみんなで共有できること。イベント企画も同じ。

（若狭）イベントのコンセプト決めは難しい。過去に何回かチャレンジしたが続かない。今は過去からのものを引き継いでいるのが多い。大イノコも昔からあるものを発展させた。

（石丸）コンセプトの前にかたち・装置ができて、後からコンセプトを議論することもある。

（松波）同感だ。これをやらずにおれないという気持ちが祭りの本質で、諏訪の御柱なども極めて馬鹿げたことをやっている。大イノコも一度見たらまたやりたいと思う。

（井上）祭りはバカバカしく気分をオーバーフロー（過剰）させるもの。そういう状況にさせるものが私の所謂コンセプトである。

（若狭）祭りは元来地域に根ざしたもの。農家や商家で毎日同じ作業を繰り返して飽き飽きし、たまには爆発させたいという情熱が祭りの原点ではないか。最近の祭りは仕事の一環として義務的にこなしている感じがするが、大イノコは若い人たちが情熱を持ってやっているので本来の祭りに近い。

（松波）岡本太郎の壁画「明日の神話」の誘致活動の一環で、縦 5.5m、横 30mの原寸大の絵を 30ｃｍ×30ｃｍのパネルに細分し、2000 人近い支援者が球場跡地でパズルのように組み立てたが、地上に置かれた絵を眺めて感動した。表現できない物語があり、これが大事だ。

「明日の神話」を地上に組立

○まちづくりについて

（石丸）まちづくりは便利な言葉だが、シラケムードになることがあり、気を付けた方が良い。

（若狭）まちづくりにはハードとソフトがあり、道路・建物・公園等のハードの上に市民が参画して何ができるかというソフトがある。我々はソフトのまちづくりを対象としている。

（前岡）100 万人のまちで 1000 人が集まれば、まちづくりの方向性が定まると思うがどうか？

（若狭）まちのことを自分のこととして考えられる人を増やすしか手がない。

（松波）大半の人は自分のことで精一杯で、余裕のある人にやってよという話になる。何と

かしなければという人が 1000 人いれば、増やさなくてもいい。その 1000 人が互いに手を組める仕掛けがあればいい。今はみんな言いっ放しで終わっている。
（若狭）言っても実現しないからとあきらめている人が多い。もっと直接的で具体的な目標が目の前にあれば行動するのではないか。

○広島と平和について

（松波）日本アムネスティが「世界人権宣言」を自分流に翻訳するコンテストをやった。「人権」も便利言葉で安易に使われているが、翻訳されると大変わかりやすい。広島の平和宣言も市長だけでなく、自分流の平和宣言を募集してはどうか。
（井上）広島・平和・復興・・・等の言葉に対して世界から超訳コンテストをしたら面白い。広島から見た広島、日本から見た広島、世界から見た広島の違いが見えてくる。
（石丸）アートの世界では広島をテーマにいろいろな視点から表現（＝翻訳）している。
（前岡）広島の復興のプロセスを表現できれば、紛争等で破壊された地域の人々に励ましを与えることができる。
（若狭）私はあまり関わりたくないが、広島は平和から逃れられないのか？被爆の記憶を風化させないことが広島人の使命とは思う。

○旧市民球場跡地の活用策

大イノコ祭り

（石丸）球場跡地にいろんな人が集まるイメージをスタディしている。祭りを楽しむツールは何か？抽象的なものでもよい。広島らしいものが欲しい。大イノコもその一つ。
（井上）大イノコを膨らませてはどうか。「振り返れば未来が見える」と言われるが、歴史を今に活かす観点が広島に欠けていた。新しさの根っこに古さがある方が長続きする。
（前岡）球場跡地で大イノコを真ん中に据えて、周囲にテント等のコミュニケートできる装置を用意して、１万人ぐらい集まると面白い。
（松波）広島市の整備計画案が１月に公表されたが、あの地に対する敬意と愛情が込められていれば、あのような案にはならない。これまで市は市民からアイデアを募り、事業コンペを行い、市民団体によるアイデアコンペも実施され、光るアイデアが沢山埋もれているのに市は総括することなく、旧市民球場跡地委員会を隠れ蓑にして今回の案を出してきた。
　市民の判断に委ねるような進め方ではいつまで経っても決まらない。政治家が英断を持って決定し、市民を納得させる力量が問われている。
（若狭）市民が政治や行政にもっと関心を持てば、政治家も育つのだが。
（石丸）市の案でいいとは思わないが、機能は満たされている。当面予算もないのだろうから、大きなハコモノはいらない。
（松波）この案の最大の欠点は、周辺の機能と融合させる視点がないこと。周りの人が協力したいと思わせるプランになっていない。

○グランドデザインについて

（前岡）我々のグランドデザインはその手の仕掛けを取り入れている。ＮＴＴ地区を再開発事業として、商工会議所や青少年センター等を組み込み、バスセンターを球場跡地の地下に移設する。事業性があると想定されるので、民間主導で出来ると考えている。
（若狭）紙屋町界隈は落ち込んでいるので、そんな悠長な計画では話にならない。一日も早く活用しないといけない。
（前岡）全体の将来像があって、当面はここまで整備し、１０年後、２０年後、・・・長期計画を持つべき。広島は世界からの支援によって復興したのだから、恩義を受けて成功した人は感謝税のようなものを払っても良いのではないか。その財源をまちづくりファンドとかお祭りファンドとして街の活性化に役立てていけば良いと思う。

＜コメント＞

　時間を経るに従い白熱した議論が交わされ、時間切れとなった。問題提起された「まちづくりに興味を持つ人が少ない」かつ、「興味を持つ人が互いに手を組める仕組みがない」に対して何か打つ手はないか。次回の座談会に期待したい。　　（編集委員　瀧口信二　文責）

お知らせ

○「原爆ドーム１００年の記憶」展、開催中！

戦前の姿

展示会場写真

現在、平和記念資料館東館地下１階で「原爆ドーム１００年の記憶」のパネル展が開催中で、物産陳列館の設計図や開館後の催しの様子、戦後の保存運動等の写真が展示されている。期間は７月１５日（水）まで。

原爆ドームは今から１００年前の大正４（１９１５）年４月５日に広島県物産陳列館として完成。設計はチェコ人のヤン・レツルで、一部鉄骨のレンガ造りモルタル仕上げ。中央に大きなドームを持つ３階建てのモダンな洋風建築は広島の新名所となる。

昭和８年には「広島県産業奨励館」と名称が変わり、昭和１８年には国・県の機関や統制会社が入居する戦時行政の事務所となる。昭和２０年８月６日の被爆により、むき出しになったドームの鉄骨や崩れかけたレンガの今の姿になる。

惨事は早く忘れたいと解体を望む被災者の声も多かったが、昭和４１年に原爆ドームの保存を市議会で決議し、翌年に保存工事を実施した。平成８年には国内の戦争遺産として初めて、ユネスコの世界遺産に登録された。

＜コメント＞

平和記念資料館東館は一部改修中のため、正規の展示室ではなく通路に展示されていた。リーフレットもなく、物足りなさを感じたが、設計者のヤン・レツルがどうして選ばれたのか等興味深い内容も盛り込まれていた。建設から１００年、激動の時代を歩んできたドームには、いつまでも被爆の生き証人としてあの日を伝え、世界平和の貴さを訴え続けて欲しい。

（編集委員　瀧口信二）

□ほっとコーナー

『新しい家族』

矢野孝江（やさしい暮らしの雑貨店 Paco 店主）

犬を飼い始めてちょうど１年になる。

「デール」と言う名の雑種の犬は、神石高原町にある「ピース・ワンコ・ジャパン」からやってきた。デールは、動物愛護センターにいたところ、犬の保護団体「ピース・ワンコ・ジャパン」が引き取り、私どもの家にくるまで、そこで生活していた。

ＨＰで写真を見て、デールを飼いたいと思った私たちは施設へ会いに行った。

デールは、スタッフの人にとてもなついていたが、私が手を出すと、震えてこちらに来ようともしない。一番飼いたがっていた娘は施設内の多くの犬の鳴き声に怯え、不安そうな様子。本当に飼えるのであろうかと皆が心配したが、食事、散歩と徐々に信頼関係を結び、今では家族としてなくてはならない存在になった。

多くのペットショップがある中で、飼えなくなったなどの理由で動物愛護センターに引き取られた犬や猫の殺処分があることをご存じであろうか。

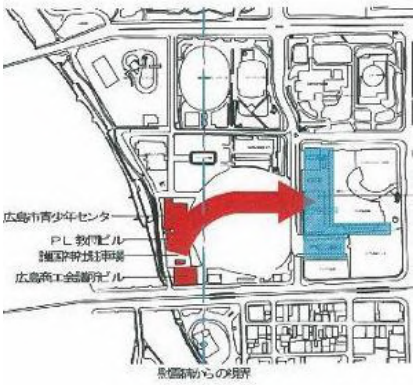
雨の日の散歩は行きたくないのが本音だが、待っている姿を見ると長靴にカッパで出かける。これがデールの生きている限り続ける、私の日課。

この１年で、少し体重が減ったことはデールのおかげでもある。

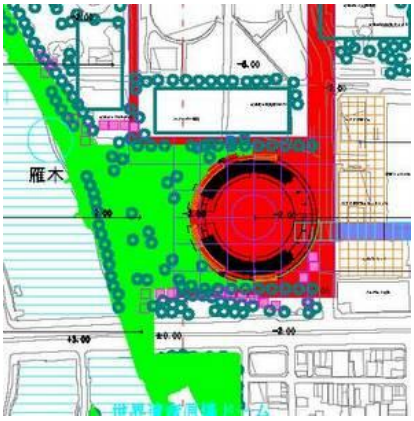
○ひろしま市民ひろばの提案！

２０１１年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会（JIA）中国支部広島地域会まちづくり委員会で検討し、ひろしまのグランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。２０１３年３月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、現在見直し中である。さらに議論の場を広げるため、具体の提案内容をシリーズで紹介していく。

提案２．河岸民有地を公園に（ガラガラポーン再開発事業）



河岸側の施設を再開発ビルへ



整備後、茶色の格子が再開発ビル

河岸民有地を公園区域に編入し、河岸への視界を確保する。NTT 所有地及びバスセンターを再開発事業区域とし、ここに商工会議所、護国神社所有地等を集める。再開発施設は市民ひろば方向に開かれたプランとする。

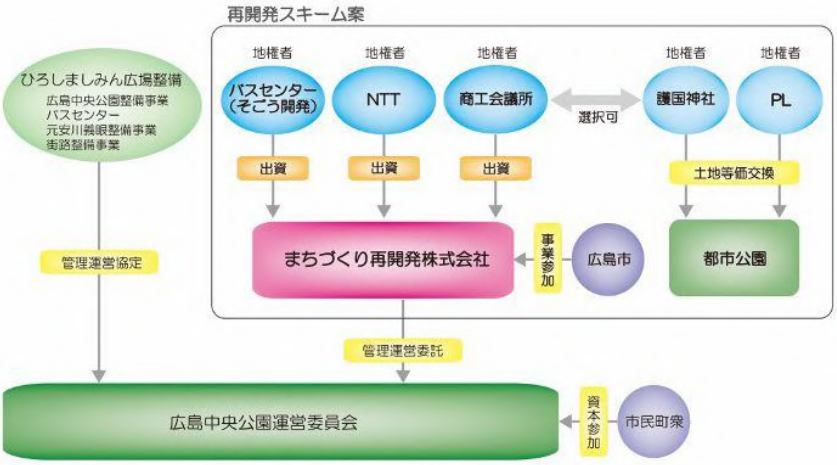
人の土地を勝手にして、と怒られるかも知れない。

原爆慰霊碑に手を合わせる時、背景に見える広島商工会議所のシルエットは、昔から指摘されてきている。広島市は、広島市景観条例を定め、世界遺産原爆ドーム周辺の景観形成を目指す。同建物は、１９６５年に元からあった場所に建設された。

着の身着のままの復興の時にあって、むしろ復興の象徴とも言えた。築後５０年、老朽化に伴って再整備が言われて久しい。元安川に沿って広島護国神社の駐車場、ＰＬ教団広島さらに広島市青少年センターと連続する一帯は、市民ひろばを大きく開放する。

一方、旧広島市民球場跡地の向かい側、メルパルク広島、そごう駐車場、バスセンターそしてＮＴＴと続く一帯は、かつては、市民球場の裏手にあって目立たなかったが、球場が撤去された途端にその醜い姿をさらけ出してしまった。これら一帯を明日のひろしまにふさわしい都市空間に変えていくには、一つ一つで考えることでは難しい。いわゆるガラガラポーン再開発が必要である。

前回は球場跡の地下空間にバスセンターを整備することを提案したが、これと一連する事業として再開発を提案する。そのスキームは、下図のとおりである。大事業であるが、真の広島の復興の象徴となる。広島の都心活性化策として認定し、必要となる公共施設部分や事業推進上の必要となる部分に公的資金を導入することによって経済的合理性を確保し、市民町衆の参加により実現を図るのは、単に夢物語であろうか。



（JIA 広島地域会まちづくり委員会委員長　前岡智之）

○こまちなみシリーズ⑦

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介する。

廿日市市・宮島の古い町並み（その2） ～厳島神社の門前町：西町、両町の比較～

宮島・西町は、五重塔・千畳閣のある塔之岡を含め、厳島神社、大聖院、紅葉谷までの範囲の社家町である。以下、宮島・西町の町並み、東・西両町の町形成の特徴比較、町家保全・伝建地区（伝統的建造物群保存地区）に係る最近の具体的動向、等々の概要を示したい。

西町の町並み

厳島神社の門前町：西町は、東町より早い平安期末以降に、それまで誰も常駐すらできない形式を変えての、厳島神社の女性神職：内侍、参拝宿舎の運営者等の常駐に始まる。鎌倉期には、神社の再建・造営に係る工事も重なり、更に大聖院ほかの寺社も開かれ、社家や社僧等の神事執行者や、更に職人達も居住、そうして夫々の生活が営まれ、次第に社家町として形成された。室町期以降は、社家の常住増、神社参拝者増による一般町人の居住等があり、西町全体が現状に近く整うのは、安土桃山期末と考えられる。

こうした西町は、主に白糸川（滝川）の扇状地に拓かれ、その東側の滝小路と西側の中西小路、それらを結ぶ御子内侍小路、その他の五軒屋小路等、更に西側の留守口小路、東側の柳小路（中江小路）、他方、御手洗川に沿い紅葉谷に向かう南小路、等の幾つかの小路を骨格とし、それに基づき、時期別に敷地割がなされ、極めて概略、添付図のA，B，C，D区域の順に、各区域にある寺社の小さな門前町の町並みが、そして全体として、厳島神社の門前町：西町としての町並みが形成されたものと云える。

西町の河川・小路・寺社等と区域区分

西町・滝小路の風景（芸州厳島図会：部分）

特に滝小路は、古くは厳島神社の神職の居住地として、棚守・上卿・祝師等の社家や内待等の屋敷、大聖院の宿坊等が軒を連ね、現在も石垣上に建つ上卿屋敷や、塀・門・大戸等をもつ家の外観等々、西町を代表する風情ある家並みを醸し出している。

西町の形成に関する古絵図等の私共の考察より、A、C区域の社僧屋敷や寺院等が立地していた敷地は、その規模・形態共に町構成の構造を大きく変えずに現在に至ったものと云え、殊に東町との間のC区域は、寺社や社家・町家等が混在し両町の各特色を併存していたとみられる。更にB区域は、区域内の社家が他区域に屋敷を移した際、その残った敷地に一般町人等が居住、それ故に他の区域の町家敷地と比べ、間口の広い敷地が現在も一部残されている。主に室町期以降、埋立により造成されたD区域は、町人等が住み始め、居住人口・世帯が増加する中で、住居数を確保する為に計画的に敷地間口を狭めた区域と云える。総じて西町は、≪厳島神社を取囲み、区域毎に寺社をもつ門前町で、寺社・社家・町家等の複合型の歴史情緒豊かな社家町の町並み≫を形成している。

東・西の両町の町形成の特徴比較

東町は海側への数度の埋立造成により、海岸線に平行の「通り」中心に、列状に順次構成した商家町で、西町は白糸川沿い等の寺社の立地を契機に、区域別に山裾を順次拓き、「小路」中心に、小さな線的・面的開発を展開した社家町と云え、両町の形成のされ方は異なる。

両町共通には、各町内・各区域の寺社の小さな門前町としての町並みを、そして各町夫々が、更に両町全体が、厳島神社の門前町としての町並みを、順次形成している。

なお古絵図を含む分析から、敷地の大きさは、東町より西町の方が大きいと云え、また両町共に切妻屋根が多いものの、西町は入母屋・寄棟屋根も多いほか、両町は家並み・町並みの構成が若干異なっているものと云える。既往調査から特に注目される町家等の事例は、各町共:数 10 棟程度あり、多くの文化財を有している。更に両町共通に、自然・土地・水・居住・信仰・生業等の基盤的要素を基本に、夫々の生活の営み、空間の共有等々があり、それらが自然域と居住域の中程の中間(境界)域等の調和に支えられ成立しているとみられる。殊に自然・居住等の中間域に関しては、台風等での山崩れ・土石流の発生等に対し整備された各河川への砂防対策と、山裾に多い小砂防ダム等を含めた、防災面から集落を守る諸機能の存在を確認したい。

西町・滝小路の家並み
（大聖院方面：遠望）

西町・柳小路の家並み
（藤の棚公園方面：遠望）

東・西の両町関連の町家保全・伝建地区に係る最近の具体的動向

前報の東町にて記載した現状の課題内容については、ほぼ両町共通であるが、ここでは特に以下を記したい。

●町家の老朽化対策については、町家の特徴保持の為に、安易に改修せずに、スケルトンとインフィルとを認識・区分し、景観面等を考慮しつつ、丁寧で堅実な改修が求められる。また空家対策については、その実態調査の必要、若者のＩターン型等の流入者の把握、更に所有者と借り手・住み手等の仲介・斡旋機能や、空家の利活用への支援機能、等々が求められる。

●町家や町並み保全への住民の動きに関して、既往組織の動きには、現在以上に活性化を期待したい。また最近、町家通りに係る瓦版「町家通り通信」を発刊した若手経営者有志等の今後の展開にも期待したい。他方、個別の動きの一つは、旅館、店舗等のレトロモダンな雰囲気へのリノベーションの動き、更にカフェの開業等々が町家通り廻り他で興っており、もう一つは、ある町家の動きで、保存会を結成し、町家保存・その利活用を目途に、自力改修等の活動を開始している。次項の伝建地区化と併せて、住民主体の各種の動きが認められる。

●一方、行政により伝建地区制定に向け開始した平成 16 年度の町並み調査以来、10 年超を経た現在、行政側は、住民への説明会にて、制度の仕組み・素案、保存地区範囲、建物維持・保存への支援、特に修理・修景基準等による建物外観保持、敷地・建物の税制優遇措置等々に係る説明を行い、その制度導入の為の保存条例化等の前段階の時点に至っている現状と云える。この時期に行政は、伝建地区としての保存遺産の場、生活・生業の場等として如何に活用・成立し得るかと云う、両面に亘る具体的説明を住民に再度行うことと、更に現状の歴史的景観保存条例等により、歴史的町並みの保全や修景等は図られ、一定の効果は得られているが、門前町全体の伝統的な文化の継承、意匠・外観の保全等の為に、伝建地区制度化の推進と、重要を冠する重伝建地区の選定等の意義等々について、改めて住民に具体的に説明すること、等々が必要であろう。なお、文化財未満の生活文化財への目配せも重要で、殊に、建物は勿論のこと、塀・垣・祠・井戸等の工作物も重視して検討されることを望みたい。

●町なかの自動車利用に関しては、両町共に、その通行・路上駐車等による騒音・危険等が、生活・観光上の課題であり、伝建地区化と併せた検討が期待される。

おわりに

●重伝建地区選定の前後関係の検討も重要で、例えば、既存の制度・条例・規制等との関係づけの検討や、重伝建地区選定に係わり、従前の択一基準の形式を守り、その上で宮島の場合、該当する全三基準一括の新たな性格づけを含めた今後の進め方の検討、等は重要である。

●観光振興については、従来の厳島神社と弥山等々を重視しつつ行うことに併せて、両町夫々の町並み・その生活遺産、自然・居住系の中間領域、等々と云う宮島の多くの要素に着目し、入島料・若者の呼込み・産業振興・伝建地区化等をも含めた≪戦略的展開≫が期待される。

●宮島口の国際コンペ等による対岸整備の動きもあり、今後は宮島口・大野等の対岸地域と宮島をより一体化し、環境と景観を計画・保全する《新「宮・廿日市」構想》が求められる。

（広島工業大学名誉教授　森保洋之）

○読者からの投稿

旧球場跡地に残るライトスタンドの活用法と役割

古池周文（広島市民球場跡地利用市民研究会）

現在市民球場跡地に残されているライトスタンドについて、活用や役割を考えてみたい。

１） コンサートや映画・演劇、子供向けのショーなどのイベント利用が可能（図参照）。

２） 今後より発展していく広島駅周辺と市内中心部。それぞれの地域が別々に発展するのではなく両方が連携すべきです。新球場と旧球場ライトスタンドがそれぞれにあることで、両地域をつなぐイベントやアイデアが生まれ、街全体として活性化され賑わいが創出されると思います。その例として、カープ参勤交代というイベントを提案しているところです。

３） 被爆の惨禍から立ち上り、一面焼け野原からの苦しい復興期。その時、市民の心の支えになってくれたのがカープの試合と球場の灯でした。それは市民の心の支えであり「希望の光」だったのだと思います。復興を通して希望ある未来へと導くまさに羅針盤のような存在。「復興のシンボルと言われていた、旧球場ライトスタンドが一部残されている」と案内されていれば、平和公園から割と人が来るのでは。年間１千万人の３％でも３０万人。修学旅行生が来て、あそこに座って弁当を食べているかもしれません。それは、原爆ドームとは別の、もう一つの重要なメッセージを発信していく存在になりうると思っています。

４）全国のカープファンによるカープファンの聖地訪問。

５）あそこで縦横無尽に走り回っている子供たち。ぶらりと立寄って座り、しばらくして立ち去る人。その様な、目的なく利用される場合が個人的には一番好きです。

６）あの時代のカープと市民球場の物語を、語り部として市民に伝える活動をされていて、実物（ライトスタンド）の上で説明したいという方々がおられ、そういった利用も。

それは、様々な可能性を秘めた、広島にとって重要な存在だと思います。魅力ある活用を願っています。

□編集後記

ホップ、ステップ、・・・まちづくりひろしま読者５００名を突破しました。創刊から３年。読者の方々と一緒に喜びたいと考えます。その時期にあってこれまで紙面に登場していただいた街づくりの実践者が集まり、これからのひろしまの街づくりに願うことを話し合う機会をもちました。詳しくは、紙面をご欄いただきたいのですが、着の身着のままの復興から、本当の復興に向けて行動を開始する被爆から７０年の節目としたい・・・に話が及びました。

また、かき船移転問題は、被爆の継承か観光かの選択ととらえれば、ひろしまの平和希求の願いが急速に変化しているとも感じられ大きな事柄です。今一度、考えてみませんか。

（編集委員　前岡智之）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度以内でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次　元中国放送役員